

水源禅師法話集 29

(2013年10月26日 京都法話会)

2014年11月28日

一乗会



アロートピュエ仏陀と達磨大師像

目次

水源禪師法話.....	1
無明・無知とは何か.....	1
どのように生きていけばよいか.....	4
「七覚支」の解説.....	6
Intoxication—不飲酒戒—.....	8
質疑応答.....	10
Intoxication—水の中毒—.....	10
教育.....	10
地獄界.....	12
真理の中で生きていく.....	13
精進覚支、カーヤヌパサナー（受随観）.....	15
間違った瞑想方法について.....	19
夢を使う手法—無意識と意識の間—.....	21
坐禅・瞑想に適した時間帯.....	22
阿弥陀仏の浄土.....	23
実践仏教と学問仏教.....	24
日本のボロボドゥール.....	25
『金剛般若経』.....	27
愛と無我.....	29
758歳のウ・パンディタ比丘.....	30

水源禪師法話

無明・無知とは何か

皆さん、ゆったりと気楽に座ってください。楽しくひとときを過ごしたいと思います。

今回は、合宿でいろいろなたくさんのお話をしたのですけれども、あまりにもたくさんサブジェクト（題材）を持ってきて、言いたいことはですね。

「どうして私たちが生まれて死んで、また生まれて死んでいくか」

という、その本源のところがあります。それは結局「無知」と、それから「執着」です。

「執着」を「渴愛」と訳しますけども、「タンハー」は、やっぱり「執着心」と。私の過去、20回の過去世、それから未来世を見ても、やはりそこは、「タンハー」というのは「渴愛」というよりも「執着」ですね。この「執着」「渴愛」は大切なところで、これがなくなれば、もちろん生まれません、ということで必ずつくものです。

ここで「菩薩道」ということがあります。「人のために尽くしたい」と。お釈迦様みたいに無量遠劫の時空を経て、菩薩になって、こうして釈迦牟尼仏陀が現れてくれましたけれども。これはその「タンハー」という、そういう心でしか輪廻転生できません。

では、もう一つの方「無明」「無知」とは一体、何か。これは、お釈迦様が言われるには「これは私、この人は私の旦那さん、これは犬」とか、これは世俗的な知識であり、これは無明の始まりであり、そういうものは一つもないと。これでなぜこうして無知で生まれ生き、生まれ生きていけば、最終的には、どうしてもこの無明の世界に入りますと。お釈迦様が言うには「この宇宙は一つだけではなく、たくさんある」と。この宇宙が崩壊したときに、まだ崩壊しない空間があります、また他の宇宙の間に。永遠に崩壊しないところがあるわけなのです。それを無間といいます。無間地獄、阿鼻地獄。どうしてもそこに墮ちていってしまうと、この無知を続ければ。それで阿弥陀様とか観音様とか、いろんな方がそこに墮とさないためにこういう法を持って、すべての人が涅槃の世界に入れば、絶対にそこに行かないと。

では、その「無知」とは何か。結局、世間で言われていることは、本当は正しいのか、正しくないのか。新聞・学校それからあらゆる文献、これ本当に正しいのか、正しくないのか。

ちょっと今、イスラーム世界では大混乱を起こしています。ムハンマド様が出たのは40歳のときで、西暦610年。そして他界されたのは630年ぐらい。だから、22年間でほとんど強烈の勢いで法を広めたのですけれども、この原点に少し問題があるのです。このことは日本の宗教界、世界の宗教界がいまだにはっきり言わないと。それには原因があるのです。これからどんどん説明していきます。

なぜかといったら、1972年にイエメンのあるモスクでね、古い教典が発見されたわけなのです。それは「サナア・テキストブック」(sana'a textbook)と言って、「ルクセンブルク・テキストブック」と言って有名で、20年間にわたってドイツの学者が研究した文献です。

最初はイスラーム教会の方々は大変な大喜びで、この文献は 715 年あたりに書かれたものであろうと。その最初の絵のときから見たら、書き方から見たら間違いないと。それは全てアラビア語で書かれているわけです。なぜかといったらムハンマドはアラビア語しか話さないと。アラビアで生まれ。そういうふうに言われ伝えて、神から受けた言葉であるから絶対に間違いはないと、そういうことでできているだけなのですね。

ところが、ドイツでX線をかけてみたら、その裏に原版があったわけなのです。715 年版は後で洗い落とした上に書かれたもので、原版は五つの言葉で書かれているわけなのです、シリア・アラメック（アラム語）という。キリスト様はいつもアラメックの言葉で話しますね、ユダヤの言葉。ヘブライ語ではなくてアラメックです。それは地方語でギリシャとヘブライの間の言葉です。という五つの言葉のカクテルで書かれているわけなのです。

だからイスラームの方では、これはアマチュアが書いたものであると。だから、それは話にならないと。ところが、これは 645 年あたりに書かれたもので、ほとんどムハンマドから死んだ後の 12、3 年ですか、に書かれたもの。ということであれば、今は全部カイロ版で、アラビア語で書かれて、スーリヤの法律とか全部これで統一しているわけですね、アラブの世界は。

では「なぜ、アラブのイスラームは仏像を嫌いか」と。メッカには三つの女神があるわけなのです。そこにはパガン（邪教）と言って、古代のエジプト文明の宗教。また、ユダヤ教キリスト教の聖地だったわけなのです。そして、そこには 3 人の女神がおるわけなのです。この三人の女神は「一切の像を破壊してくれ」と。そうすれば「私がますます力が強くなる」と。だから、メッカの建物の中には三つの柱があります。そのことなのです。ただし「一切の他の銅像は破壊してください」と。だから、神が「私の 3 人の娘は今どうしているか」と、ムハンマドに言ったときに。つまり神には 3 人の娘がいるということです。奥さんもいると。

これが有名な『The Satanic Verses』（『悪魔の詩』）といって、サルマン・ラシュディという人が本を書いてね、懸賞金を懸けられて何十年も追跡されて殺されそうになった、この話なのです。この一節が今は消されています。つまり、本当のものだと信じ込んで、この千数百年間、人が信じ込んできたでしょ。この原典は全く違うものが書かれているわけなのです。解析もまた全く別なものなのです。

というように、これ「無知」と言います。皆さんが天才的なアインシュタイン、「 $E=mc^2$ 」。これは数カ月前にロスアラモス（ロスアラモス国立研究所）で実験したら、そうならないのです。では、皆さんは「何を一体、本当にして、これが真実だ」というものがありますか、実際に。それは「食べる、歩く」、「自分の身体」、これが本当。

というふうに、政治経済こういうことは、ほとんど真実から離れています。たとえば、今 TPP と皆さん言っているけれども、29 項目の中で実際の貿易関係はたったの 5 項目。その原版はアメリカの congress（議会）、国会ですね、国会議員も見られない。もちろん、日本の国会議員も見られない。安倍首相がこれは見せない、交渉中だからと。いったん提携してしまえば、国民を超えて世界的な機構にしてしまうと、国連みたいな。ということは、もはや一国で、自分で決めるということにならないと。まあ、これは政治体系ですけれども。

私は青森生まれなので、ちょっと失礼ながら、青森生まれの東京大学の大学院の、東洋文化研究所の准教授の A さんと言う（方の）本を持ってきて。ここには『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴーサへ』、哲学ですね。これをひもとけば、結局、日本では最高峰だと思います。なぜかといったら、彼はケンブリッジ大学のダーウィン研究所の客員教授もやっているから。つまり体験なくして、ものを書いているから。彼自身もはっきりしないわけ。

前世の行為の生存。今世の生起との生存。今世の行為としての生存。来世の生起としての生存。

これを何するかと言えばですね。これは「前世、現世、来世」、つまり、お釈迦様が菩提樹の下に坐った、非常に重要な「縁起次第」というお経なのです、経典。ここから全て発生しているわけなのです。

これはね、つまり「無明」「無知」から「サンカーラ」（行、形成作用）つまり、心の仕組みが発生してしまうと。そして、これによって「サンカーラ」（行）によって、心の行識が始まるから、意識が組み合わされると。この意識の組み合わせによって、物質と組み合わせる。ということなのです、ちょっと解説すれば。それで、その解析はこうなります。これなのです。心の一瞬一瞬、光以上の速さで動きます。これを止めて観るのをナーマ・ルーパ（名色）といいます。

だから、結局どんな頭を使っても、哲学で言っても、無理ということ。だから失礼ですよ、まあ同郷の人間だから、いいでしょう。分からないことを書いて、これを一生懸命、勉強して分かるわけないでしょう、気がおかしくなる。これが現状です。

たとえば『清浄道論』（佛陀瞿沙造・石黒彌致譯註、東洋文庫、1936）というすごい文献ですけれども、これもひもといてみればですね、できないことを書いている。これをやったら体を壊します。どこにも行けません。「墓場の中で雨風、避けることもなく瞑想する」、やる必要もないです。お釈迦様はこれ禁じていました。この中の大体数ページも書いてないです、これが。その行をやるのに、この1冊、2冊分必要です。ということが現状なのですよ。

ただ、才市さん¹と言う方がね。「吸う息も心、吐く息も心」²と。これはお釈迦様が「これ以外に涅槃に達する方法はありません」というお経が『サティパッターナ』（『念処経』、『四念処経』）という最初の入り口なのです。1930年代に他界された「妙好人」³という方です。この方は、こういう先生のように本は読んでいません。高名な A 教授は、びっくりするくら

¹ 石見の才市（1850-1932）：浄土真宗の妙好人の一人。石見国大浜村字小浜（島根県大田市温泉津町小浜）出身。他力の信心を詠んだ念仏詩を8000首以上、残している。

² 「心は出入りの息にまかせて世を過ごすこと 出入りの息こそ南無阿弥陀仏」

（適宜、漢字を仮名、仮名を漢字に置き換えた）

³ 特に浄土真宗の篤信の念仏者を指す語。『仏説観無量寿経』流通分に「もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華（白蓮華）なり。観世音菩薩・大勢至菩薩、その勝友となる。まさに道場に坐し諸仏の家に生ずべし」と、釈尊が念仏者を讃えたことに由来する。この「分陀利華」を釈して、善導大師（613-681）は『観経疏』散善義に「分陀利といふは、人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中の上上華と名づけ、また人中の妙好華と名づく。この華相伝して蔡華と名づくるこれなり。もし念仏するものは、すなはちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり」と、念仏者を五つの誉め言葉で讃え、その中に「妙好人」の語が出ている。

いの文献をバーッと読んでも、このことが分からない。これはお釈迦様の言った「ここから入ってください」と。これには一つも書いていない。それは大学の文献としては素晴らしい。なぜかといったら、こういうふうにチベット版の『解脱道論—頭陀品チベット校訂本文並びに訳註』（ウパティッサ述作・佐々木現順校註、法蔵館、1958）、『清浄道論』、私が見て「ああなるほど、これではできない」と。「意味をなさない」と。だから、体験によってしか解析できないのですけれども、こういうこと全部やらないといけない。あのナーマ・ルーパ（名色）を観禅でするときに。ずうっと全部を観ていくわけです。

因果の法則はですね、28の物質と81の心の作用が組み合わさって、109を四つの方向から一つ一つ分析したときに、ナーマ・ルーパが完成します。それで、一念に七つのインプット、ダダダダダダッって書き込まれます。それも全部観ます。それも書き込まれるときは三十四善心¹か十八不善心かすべて観ていきます。想像を絶する瞑想なのです。これをダンマヌパサナー（法随観、パオ系）と言います。これは非常に難しい。

それで、お釈迦様は四つの方法を残してくれました。日本ではね、日本の経典では『念処経』ということで、「身」＝からだ、「受」＝受ける、それから「心」＝心、それから「法」、という四つの法門を残してくれました。これをパーリ語で言えば、カーヤヌパサナー、これはマハシという非常に有名なミャンマー。ヴェーナヌパサナー、これは完成したものでもないのだけれども、その半分くらいをゴエンカさんで教えています。チッタヌパサナー、心法、これが禅、東洋に来た達磨大師。それから、最後のダンマヌパサナーがパオ僧院で教えています、40の瞑想法。

私の弟子が言うには「近年において（パオ僧院の）教科を半分くらい削った」。ということですが、結局パオでは預流果に入る12の段階まで教えます。つまり、最終段階のヴィパッサナー（勸禅）に入るときに、強烈な方法をやらせます。だから、そこがほとんどできないからまあ「前世、過去世、来世」くらい観せてと、16段階あります、最終の涅槃に達するまで。

というふうに結局、今回、私が来て一番心配したのは。こういうふうに、日本で天才的な東大の教授でも、実際の瞑想で体験することと大いに違うことを本にするものだから、一般の人は理解できないなりに、ああ言えばこう言う、すべて簡単に目隠しされて、どこでも連れていかれます。それで、私が方法はただ一つ「あなたがしっかりお釈迦様の方法でやってください」と。「どうすればいいか」ということを合宿でこつこつと教えたわけです。

どのように生きていけばよいか

まず瞑想法でなくても「どういうふうに生きていけばよいか」ということが最も大切です。この基本、それは「人のために尽くし、愛の中で生きてください」。そうすれば「人を殺めることもない、盗むこともない、騙すこともない」、このお経（法話会で配布した護経〈Paritta〉）のとおりです。それで、すでに浄化していきます。そのうえで瞑想法に入ってもいいし。さっき言った才市さんみたいに「吸う息、吐く息、心」、これ完全なアナパナサティ（入出息念）、

¹ 善心の34種の要素。意識1種、共浄心所19種、共一切心心所7種、雑心所6種、慧根1種で34種になる。

マインドフルネス・ブリージング。誰に教えられなくても、やっているわけなのです。曹洞宗大本山總持寺の第二祖の峨山韶磧禪師のお言葉に「法なくして説く人は仏を殺す」¹と。これももう大変な域に達している。

というふうにね、皆さんは経典を読んでください、と言っているわけです。本当に読んで、自分で解釈できるのかと。「十二因縁」「因縁」と言うけれども、それよりは自分の身体を使って仏と一体になる方がもっと簡単だと。それで進化してくださいと、もし行が難しい人は他にも色々な瞑想法があります。もちろん、こういうふうにダンマヌパサナーで、禪法でいくということは、もっと素晴らしいことだけれども、いろんなことがありますから。実際に、去年、ウェーダヌパサナーを教えて20年間、病に苦しんだ人が1年後にそれが取れて、その病気が治りました。というふうに、話だけではないのです。これをやれば、誰も病気になりませんよ。それがまたこれを習いに行くとしたら「これしてはダメ、あれしたりしてはダメ」で、本当はそれ必要ではないのですよ。ただ簡単にやっていけばなるのだから。それもたった2日教えて、1年後に病気が完全に治ったと。20年間お医者・病院が治せないのに。実態なのです。本当のことなのです。

だから、瞑想というのは、ただ涅槃に行くとかそういうことはもう最高だけれども。難しいけれども、ただそれに向かうことによって、修行をすることによって、そういういらぬものが全部、落ちていくから、病気も治ってしまう。また自分も幸せになり、他人も幸せにしていくと。

そういうふうなことで、今回も大変な奇跡を体験しまして。去年インドネシアでね、金剛界・胎蔵界という立体曼荼羅を構築したナーガールジュナ²（龍樹菩薩）様（150頃-750頃）のゴールデンポイントを発見して、そこには第一弟子の龍智、金剛智、不空三蔵ですね、3人ともそこにいた。それで、1200年前に弘法大師様が日本に渡ったときに、ちょうどその時期に龍樹菩薩も他界されたと。

そして、奇しくも私が去年、護摩焚きの法を得てボロブドゥールでやったおかげで、今回は日本で大変な発見をしたわけなのです。1200年前に弘法大師が隠し寺を造って、そこが大変な世界に対するポイントだ、ということを隠していたわけなのです。ここは神武天皇が三種の神器を受け取ったところなのです。日本の国が始まるころなのです。それがピターッとゴールデンポイントを、そのボロブドゥールで見つけて「日本にもあるはずだ」ということで、Kさんが図面を引いて、そこに行ったら、やっぱりそこにあったわけなのです。そこでまた第九禪定で瞑想して。そこでまた世界がこれから善くなると思います。今の悪い花がどんどんしぼんでいくと思います。

というふうに、私たちには、頭で考える、それ以上の世界がもう構築されているわけで。また、その場に行くまでは絶対に分からないわけなのです。だから、その場に行くときには、

¹「正覚なくして説教するものは、どうだ、その人は、仏の教えを殺しつつあるのである」
（『峨山百一話』）

² Nāgārjuna：龍勝、龍猛とも訳される。南インドのバラモン出身の僧。大乘仏教の大成者で中観学派の祖。「八宗（すべての大乘仏教の宗派）の祖師」「百本論師」などとも称される。

もうこんな山道とか迷い道、そのナビでね、変な所に連れていく、何回もナビは間違っただ道を選んだり、あり得ないことです。やっとの思いでそこにたどり着いたのだけれども、実は簡単に行ける本道があるのに、崖っぷちみたいなどころ、山奥に入れられてとか、まあおかしいことなのです。

というふうに、そういうことも外的な力も入っています。地球外の力も入っていると。こんなこと言ったら、みんなびっくりするでしょうけれどもね、ホワイトハウスのジョージ・ブッシュ、第二期に勤めたペンタゴンの高官がね、国を決定する人たちが「私たちが隠せたことはたった二つ」と。「アメリカ金庫に金塊が一つもないこと」と、もう一つは「エリア51、UFOとエイリアン、それを隠し通せた」と。驚くべきことを今、堂々と言っている。

だから、常識は常識ではないわけです。ほとんど皆さんは狂った世の中で、狂わされて生きているわけです。というのは、こういう天才的な偉いA先生でも分からないわけなのです、実態は。ところが、こういうふうに「妙好人」という人は、一切こういうことをしなくても自動的に分かって阿弥陀の国に往（い）く。心なのです。心だけが次の世に行きます。お金は1円たりとも持っていきません。1000人の恋人も連れていきません。たった1人、自分の心だけ。親兄弟も連れていけない、そのことをお釈迦様は言っている。

「七覚支」¹の解説

自分の心。心この進化の方法を「サティパッターナ」という「四念処」で教えているのですけれども、ここでちょっとだけ解説します。これは前、言ったのですけれども、日本では『念処経』、パーリ語では『サティパッターナ』、これは英訳ですけれども、これで博士号の論文を取ったスリランカで最初のクスマ比丘尼が「自分がやったところだから」ということで、抜粋してくれたわけなのです。

これと二つ比較してみたら、大切なところが日本では抜けているのです。「七覚支」という言葉を書いているけれども、「これは何を意味するのか」ということが明快に書いていない。またこの英文でも「Enlightenment of Seven Factor」という英文で書いてあるけれども、これは解説しなければ、分からないわけです。なぜ、これが大切かと言ったら、日常生活において、この七つの心の状態を見たときに、その「自分はどのような状態であるか」という、それがバロメーター、羅針盤になって。それが中間にあって、安心したときはよいと、そのまま進むと、それを「七覚支」。

それは日本語で言えばですね、経典で言えば、「三十七道品」という涅槃に達するための中の一つだけれども、「七覚支」。これはパーリ語の南伝の経典では『サティパッターナ』の中に、その七つの「Enlightenment of Factor」で書かれています。

まず経典に「七覚支」は「念、択法、精進、喜、軽安、定、捨」。パーリ語の方で言えば、マインドフルネス＝「念」、「択法」＝investigation, 「精進」＝energy・・・ここが問題で

¹ 七覚・七覚支・七菩提分ともいう。さとりを得るために必要な七種の修行項目。念覚支、択法（ちやくほう）覚支、精進覚支、喜覚支、軽安（きょうあん）覚支、定覚支、捨覚支。

す。「精進」というから、「精進、精進」「努力、努力」そうです。いや、「病気をしなさんな」ということ。病気をしたら瞑想できませんと。寝るしかないということ。だから、お釈迦様が一時、病気になったとき、これを思い出して、自分の体を観たときに病気が治ったと。大変、重要なところが、いまだに説明されていない。

その次に rapture = 「喜び」。この rapture という喜びは結局、ベートーヴェンが第9番（交響曲第9番）のジョイ（喜び）を体感した、そのことなのです。だから、坐ってそこに、ヤー—という歓喜みたいな気持ちがあれば、どんどん進化します。それがなくては、ただ砂をかんだだけでは、全然ダメ。逆に病気になります。それを「喜」と言うのですけれども、このことなのです。

またマインドフルネス = 「念」ね。これもサティ（念）と言って、これを起こすには、本当に心から信仰心がなければ、この「念」がでてこない。ただパワーといたら、この「念」「サティ」は出てこない。マインドフルネス。なぜかと思ったら「ああ、阿弥陀様、阿弥陀様、ああよかった」と、涙が出たときに、これを「サッダ」「信」。「信念」の「信」が発生して、そして「念」が発生する。だから、この「サッダ・サティ」つまり「信念」によって、「慧」（智慧）が発生するわけ、パンニャー（智慧）。

ということを事細かに指導しなければいけないのです、瞑想する先生は。だから、一人一人、解析していかなければいけない。それはパーツとって、これはできない。だって年齢も違う、生まれた環境も違う、家庭も違う、一緒にできるわけがない。だから、本当の先生に出会うと言うのは非常に難しいです。なぜかと思ったら、本当にマンツーマンぐらいしでしか実は教えられないのですよ。10人、20人になったら、もう精一杯で、その急速にやるときには、へとへとになるくらいだけでも、短期間だからできるけれどもね。

まあそれで、第五の「軽安」。これはチッタラフタ (citta-lahuta: lightness of the minds)、カーヤラフタ (kaya-lahuta: lightness of the mental body) という、この三十四善心の中の非常に重要なところですが、ここのナーマ・ルーパ（名色）の、その心ね、心身。それが明快に分かったら、これが説明できます。なぜかと思ったら、子どものときに跳ねても飛んでも「心軽く」と、そのことなのです。「何の障害もなく、ただ楽しい」という、その「軽安」。ここが「軽安」という意味です。これを tranquility と英語で言う。tranquility というのは静かなはずだけれど、ここでも英語でも解析できない。これがまた、いまだに誰も言わない。南伝にしろ北伝にしろ。そのことがまた驚きなわけです。だから、もう本当にこうして皆さんに重大なところね、かいつまんで、ここだけ。

その「七覚支」の最後、equanimity = 「捨」、この equanimity、「捨」というのは「ウペッカー」「捨」、全て捨てる、捨だから、そうではないです。そのときには、一切の「キレサ (kilesa)」（煩惱）というか、煩惱が落ちたときに、心がとってもこう平安になるでしょう。これを equanimity と言います。equanimity、この状態。

だから、心騒げば絶対に瞑想がうまくいきません。だから、この七つが合わさって瞑想がうまくいくか、また生活体系でも、ここを指針にして生きていけば、問題ないのです。だから、ここは阿弥陀のお寺なので言わせてもらえば「南無阿弥陀仏」と言ったときに、この七つがパンと起こったときに成功。ブレが入ったら、まあ、どこかがもう1回、修正し直すと。

禅をやる場合はダンマヌパサナー（法随観、パオ系）、チッタヌパサナー（心随観、禅・念仏系）でも、この七つがしっかり入っているかどうかを見ると。それで、どんどんどんどん精進していくと。

そのやり方は、まず「自分の内側を観る」と。「外からもちょっとイメージで観てみる」と。そして「内に外に両方から同時に観る」と。それが手法です。こういうことで、お釈迦様が一時、病気になったときに治ったと。有名なマハーカッサパ（摩訶迦葉）尊者¹だと思うけれども、この方もこの手法で治ったと。これがポイント、最大のポイントになのです、瞑想において。実に簡単な言葉で言えば簡単なことだし、これがただ「七覚支」—「念、択法、精進、喜、軽安、定、捨」。

分かるわけないでしょう。ということ、いまだに必死になって、日本全国でやっているわけです、経典仏教とか何とか言って。日本でいえば、スマナサーラという長老が『ブッダの実践心理学』とかいう本でベストセラーを書かれているんですけども、ちょっと引いてみれば、この人カンニングしていると。「音は、重さと硬さと土のエネルギーである」と。これはカンニング、中間がバッチリ抜けている。

だから、こういう人が書いている本を一生懸命、読んだって分かるわけがない、これが現状。だから去年もね、非難されたと思うのだけれども、「まあまあ桜の花の下で、ゆったりとお酒でも飲んで、自然にきなさい」と。そっちの方が、よっぽど心が進化しますからと。

Intoxication—不飲酒戒—

なぜかといったらね、「五戒」「酒は飲んではいけない」と、そうでしょう？ ところが、1930年代に、アメリカでは、北米では「酒ほど恐ろしいものはない」と。家庭も破壊するし、ダダダッターと。「1滴の酒も飲んではダメ」と。それで禁酒法ができて、アル・カポネとかいっぱい出て、映画であるシカゴとかニューヨークとかギャングが戦って。そのときに「麻薬はいくら飲んでもいい」と。「麻薬ほどいい薬はない」と。ちょっとこれおかしいのではないのでしょうか。麻薬の恐ろしさは大変なのですよ。「1万人にいれば1人だけが、もう1回、普通の生活に戻れるか」という、とても恐ろしいことなのです。

だから、中国はアヘン戦争で滅びたでしょう。あれは、イギリスは「これは大変いい薬だ」と、トランキライザー（精神安定剤）と言ってね、「平安になる」と。アメリカでもまた売っていたわけなのです。ところが「酒はダメ」と。「酒ほど悪いものはない」と。「酔っ払う」と。ところが、タバコ、コカイン、そういうものは経典に書いていないから、「どんどんやってもいい」ということはないでしょう。

つまり、経典にはこう書いているのです。intoxication=「酔っ払うな」と。『いろは歌』に、こう言うでしょ。「有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず」と、ちゃんと書いているわけなのです。ギャンブルに酔う、そうでしょう、ワーっと酔う。どうしても、その試合を見に行かないといけなと。何があっても行っちゃう、自制がない。毎日、薬を飲

¹ 大迦葉（Mahā-ka-śyapa）尊者：釈迦十大弟子の一人。釈尊の死後、初めての結集の座長を務める。「頭陀第一」といわれ、衣食住にとらわれず清貧の修行を行った。

まないといけないと。もう毎日、飲まないと倒れそうと。これも酔っ払い、intoxication。だから、水だけ飲めばいいと。水の中毒というのがあるのですよ、飲み過ぎると。だから、「なんでもほどほどに」ということです。つまりね、「無知」から来るわけなのです。

まあ、強烈な話になったのだけれども、1時間ぐらい話しましたから、これくらいでよいでしょうか。あまりこうきつい話になってしまって、学問的なこともいいましたので。またこれ説明すれば、頭が痛くなるだろうから、楽しい話でもして。法話は、これくらいでどうでしょうか。



水源禅師のクティの湖

質疑応答

Intoxication—水の中毒—

【参加者】

今、「水の中毒」があるとおっしゃいましたが、それは？

【水源師】

「水はよいものだ」と。それで毎日、飲むのです。毎日たくさん。これで「水の中毒病」というのがあります。

【参加者】

飲みたくて、たまらなくなるのですか。

【水源師】

なんか、そうそう。それで身体が、水がたくさん入りすぎて、全ての栄養が流れ出す、という病気になるわけ。もちろん、その中毒というのは、カフェイン・お茶を飲み過ぎて止まらないとか、コーヒー飲んでやめられない、それからタバコやめられない、intoxication。また、夢中になりたいと。ゲームでも何でも、これも intoxication。それから有頂天に騒ぎたいと、自制を外して。これも intoxication、酔っぱらっちゃう。その騒ぎの中でワイワイと。ということが全て入るわけなのです。ただ日本では「酒を飲むな」、それだけ。「後は何してもいい」と。「麻薬を飲んでも何しても」と、そうではないのです。ということを事細かに、実は解析していかなければいけないわけなのです。

ただ、これをいまだに明快にちゃんと生活から解析してくれる人の文献は、私はいまだに見当たらないけれども。あそこ・こちらで偉い方が法話でもう言っているのだと思うけれども。こういうことは事細かに皆さんに、そういう「法の果物」を分かち合った方がいいと思うのですけどね。

教育

【参加者】

初めてこちらに伺って、お話を伺っているのですけれども。先ほどおっしゃったように「周りの世間が言っていることは本当か嘘か、正しいか正しくないか」という点で、私がふっと受けたのは、周りにあるものというか、今までメディアで教えられているものが、全部、悟りの邪魔をしているような、そんな印象を受けたのですけども。

【水源師】

そうです、アーティフィシヤル（人工的）情報による心の病気を起こします。

【参加者】

全く外からの情報というのは一切、受け付けないというか、信用しないでした方が…

【水源師】

というふうに教育を受けさせられています。

【参加者】

「信用しろ」というふうに…？

【水源師】

教育されています。

【参加者】

ああ、はいはい。

【水源師】

というのは、現在の教育はプリンストン大学の1930年代に作成され、それで全世界のアカデミックが構築されているから。だから、その中から抜け出して、自分で自由にということは、ほとんど不可能。特に学校教育は、それに全て組み込まれているから。だから、分からずにして、死んでいきます。ということをお釈迦様が言っております。ということは「世俗の真理と本当の真理は違います」ということ。だから「世俗の真理」で行けば「無明の世界」に行きます、どうしても入ってしまうと。だから、戦争を起こして、それでよしと。人を殺し合うでしょ、これはダメなのです。

昨年、マレーシアで（ある方が）「私は三つのときから日本帝国軍の軍事教育を受け、天皇陛下のために中国へ行き南京虐殺をしました」と。「私はそのとき、その若い女性が赤ちゃんを抱えているときに、上官の命令によって殺さなければならなかったけれども、刀で突いたときに逃げた」と。「同僚がそれを撃ち殺した」と。そして「全て同僚は地獄に今、堕ちています」と。20歳ぐらいの沙弥の方です。なぜか私が日本から来ていると、日本語を話すということで、大変に長いこと、いつも私を見つめていましたが、勇気を出してベンチに座っていた私に話しかけてきました。

「私はその後、日本に帰って死ぬまで一生懸命、仏道に励んだおかげで、今こうなっていますけれども、今こういうふうにサマネーラ（沙弥）の修行に入っていますけれども、この衣を受け取るのにも、もう死ぬほど苦しい思いで受け取りました」と。そうなのです。それで「毎日1000ページぐらいの〈お許しください〉という（懺悔を）文章で書きますけれども、たった1ページぐらいしか心が休まらない」と。「日夜、強烈な恐ろしさに悩まされる」と。

地獄界

地獄界のことを言いましょう。阿鼻地獄（無間地獄）とうのは第八地獄で、そこに堕ちればね、中劫¹という時空、ちょっと分からないでしょ。第七地獄（大焦熱地獄、大炎熱地獄）に堕ちた場合には半中劫。第六地獄（焦熱地獄、炎熱地獄）は5京4568兆9600億年そこにいなければいけない。阿鼻地獄というのは、一日に万死万生、口を開けて、鉄を飲まされて、そして鉄の溶けた池に落とされ、引き上げたときにまた再生。気の遠くなるようなことをしなければならぬわけ。

お釈迦様はこう言いました。「〈地獄がない〉ということは、言うてはダメ」と。「大変なことになる」と。また「〈来世がない〉ということもダメです」と。

ずっと前に言ったのだけれども、ここで。(ある行者が)「私はこれから兜率天に行く」と、次の来世は。すごい行者で。「ほう、なぜか」と。「そこには弥勒菩薩がいて、どうしてもそこで修行したい」と。「ただ、私は6世前に地獄だった」と。「ただ熱い熱いだけ覚えている」と。それはカッサパ仏陀（迦葉仏）のとき。「どうして出てこられたか」と。「カッサパ仏陀にお供えしたのですよ」と。「その功德のおかげで、そのとき出てきました」と。「ただ1劫の間、熱い熱いだけ覚えている」と。第八地獄から第七地獄を見たときには、第七地獄がね、身を砕かれて恐怖の世界が、それはまあ、天国のように素晴らしいところしか思えないと。それぐらい第八地獄は宇宙が滅びても滅びない、というすごい怖ろしいところなんだと。

「宇宙がいっぱいあります」と、お釈迦様は2500年前におっしゃっていました。これが今現在の天文学で「どうもたくさんの宇宙がある」と。こういうふうにごんごん変わっていくわけなのです。だから、宇宙と宇宙の間に時空が存在するわけなのです。宇宙がパーンパーンと滅びても、ここの空間は滅びない、そこに堕ちてしまうという。

というふうに、たださっき言ったように「人のために尽くして、愛の中で生きてください」と。この法だけで絶対、大丈夫。だからそういうことで、どんな無明の知識があっても、全部、跳ね返されるわけ。「人を騙してよい」ということはないからね、それは人のために尽くしていない。人を殺して、それはよいことはないですよ。だからさっき言ったように、いかに国家権力でやったって、やっぱり地獄にポロポロッと堕ちて、大変なところに行ってしまうわけ。だから今、イスラームで「自爆して天界に行く」って、絶対に行きません。そういうところはありません、宇宙には。だから、実際に全宇宙を観る必要があるわけなのです。そのためには、やっぱりニミッタ（丹光、禅相）という手法があって、お釈迦様が教えてくれたダンマヌパサナー（法随観、パオ系）で、全宇宙が観えます。全宇宙どころか他の宇宙体も観えてしまいます。時空を超えてしまうのです。

という、こういうふうな本当のインフォメーション（情報）を伝えなければ、東京大学のA教授には悪いのですけれども、彼自体も一生懸命やっても哲学ではどうしても分からない領域。彼自体もこれを読んで、文献を並べているだけで、内容は一つも入っていけない。だから、これでは天国・地獄が全然、観えない。

¹ 劫の時間は経典によって相違があり不明瞭であるため、現在、誰も明快に回答していない。

天界もありますよ。阿弥陀の国は、それは素晴らしいですよ、楽しくて、楽しくて。虫もいるのですよ。虫さえ往（い）けるのですよ。本当にいます。経典にも書いていますよ¹。というふうに、そんなに難しいことではないのです、お釈迦様が説いていることは。（質問者に）どうでしょうか。

【参加者】

ここは何地獄になるのでしょうか。

【水源師】

ここは娑婆世界。ここにいるから、修行ができるわけなのです。ここにいるからこそ、法を学べるわけです。法に出会うということは、これは実に難しいこと。東京でも合宿でも言ったけれども、私が20回前の世代のときに、法を探して探して出遇えないで、木の下で死んで行きました、この衣を着て。その次に、その功德によって天界の王に生まれて、全宇宙を探しまわったけれども、やはりみえなかった。その「会いたい」という「タンハー」、法に出遇いたいという「タンハー」（執着）の心によって、次に出遇ったのがカクサンダ仏陀（拘楼孫仏）を牽（ひ）いた白い牛になって、いつも仏陀のそばで話を聞いて。そのときの法が「人に尽くしなさい」「愛の中で生きなさい」と。

お釈迦様も法を求めて五十三の素晴らしい聖者を探し求めて「法を教えてください」と²。「もしその火に身を沈めたら、教えてあげよう」と、ブラフマン（梵天）が、その老人になって言ったわけなのです。そうしたら、お釈迦様がポーンと火の中に飛び込んだときに「人のために尽くしなさい」ということを。

これは「悪しきことをやめ、善きことをしなさい」と、いうことなのです。これが『清浄道論』の中核で「善心・不善心」のことなのです。驚くべきことに、ユダヤ教の「トーラ（Torah）」（聖書）の奥義には、このことがちゃんと載っているわけなのです³。神がアダムに「人間は悪しきこと・善きことを知る生き物なり。永遠の命を与える」と。それはカトリックになれば消えています。キリスト教もエボナイト、マルシナイト、ノースグッド、プロトオーソドックス、オーソドックス、カトリシズム、プロテスタント、どんどん教えが変わっています。

真理の中で生きていく

だから、真理の中で生きていかなければならないということです。『ニップール・タブレット』（『Nippur tablet』）といってね。今から5000年前、バグダッドの南に王国があったところから発見された土器の本、その中にはライブニッツの微積分、サー・アイザック・ニュー

¹ 阿弥陀仏の第四願に「諸天・人民、蜻飛蠕動の類、わが名字を聞きて慈心せざるはなけん。歡喜踊躍せんもの、みなわが国に來生せしめ、この願を得ていまし作仏せん。この願を得ずは、つひに作仏せじ」（『大阿弥陀經』卷上）と、蜻飛蠕動（飛びまわる小虫、うごめくうじ虫）の類の浄土往生も明確に誓われている。

² 『華嚴經』「入法界品」では、善財童子が発心して五十三人の善知識を求めて歴訪する。

³ 『水源禪師法話集』第23巻「善と悪」（4頁）参照。

トンの微積分がちゃんと書かれているわけなのです。プラトンの国家論も書かれているわけ。その王様は一切の太古の経典を読めると。だから、1 万年前の経典から引き出して書いているわけ。

だから、私たちはね、こういうふうな常識で生きているけれども、この常識がどこまで正しいかは分からないのですよ。その昔、人類は5万年前で、北京原人は50万年前。ところがなんと、つい最近、160万年の現代人の骨が見つかったのですよ。その間のクロマニヨンとか北京原人を外して。

私は科学が好きだから、科学の大体、読んでしまう。経済も全て。そうした場合にはどんどん変わっていくわけなのですよ。ところが、それを全部信じ込んで、ウォール・ストリートとか株をやって投げてとかね、国家が滅亡したりとか、無駄なことばかりするわけ、一生。持って行けるのは「あなたの功德だけ」。「功德」というのは「人のために尽くし、愛の中で生きなさい」、難しいですよ、難しい、でもこれがキーポイント。

ある人がものすごく瞑想がうまく行ってね、「私は全世界の人を愛したい」と。「喜びでいっぱいだ、何もかも愛したい」と。ここなのです。これをムディター（喜）と言います。これが第9番（交響曲第9番）のベートーヴェンの域なのです。これが才市さん、何回も出すけれども、「ただ喜び喜び」¹と、ここなのです。

そういうふうな強烈なことをしなくてもね、ただ簡単に（水源禅師があるお医者さんに）「あなたはこれしなさい」と。「お医者さんだから。ここをこう観てください」と。自分の専門だから分かるわけなのです、どう観たらよいか。だからズズズズズッと行ってしまふ。それで（そのお医者さんが）「私、お医者さんをこのままやっけていいのですか」と。「いや、しなさい」と、「食べなきゃダメだから」。「瞑想の方が好きになって…」と、「いや、それはダメです」と。やはり生活あつての法でありますから。

だからただ坐ることだけが修行ではありません。「生活そのものが修行」です。だから「坐らなければ、南無阿弥陀仏できない」と、そうではないのです。「〈歩く・座る・動く〉全て阿弥陀でいけばいい」²のです。これが浄土禅（念仏三昧）の基本です。

ただ時間があれば、もっとそのダンマヌパサナー（法随観、パオ系）とかね、お釈迦様が教えた法で行けば、これはまたすごいのですけど、この四つの法門すべてよろしいです。そういうことですが、どうでしょうか。

【参加者】

ありがとうございます

¹「よろこびは 世界に満ちて 心に満ちて 世界も心も 南無阿弥陀仏」

（適宜、漢字を仮名、仮名を漢字に置き換えた）

² 親鸞聖人も『高僧和讃』源信讃に「男女貴賤ことごとく 弥陀の名号称するに 行住座臥もえらばれず 時処諸縁もさはりなし」と、念仏するのに、男女や貴賤の差別はなく、歩く・立つ・すわる・横になるの区別もない。どんなときでも、どんなところでも、どんな境遇であっても、どのような生活でも、さしつかえない、と讃えられている。

精進覚支、カーヤヌパサナー（受随観）

【水源師】

まあ、恥ずかしがらずに（どなたか質問を）どうぞ。

【参加者】

いいですか。6年くらい前にヴィパッサナーの瞑想をしていたときに、突然こう顎（あご）のあたりがガクガクッと動き出して、それを5分か10分くらいしたら止まる、というのが3カ月くらい続いたのですね。まあ、かみ合わせが悪かったりして、顎とか首とか私はすごく負担がかかっていて、矯正も前の年にしたりしていたのですけれども、やっぱりそういうようなことって起こるのですか。

【水源師】

それは正しい瞑想法を教えてもらわなかったから。そのときにちゃんと指導してもらえば。そのときはどのヴィパッサナー（観禅）をやっていました？

【参加者】

それはネパールでゴエンカさんのところ。

【水源師】

おかしいね。ゴエンカさんだったら絶対、発生しないはずですよ。どういうふうな教え方をしてもらいました？

【参加者】

どういうふうなというのは、その英語でずっとありますよね、指示がね、それでは私がそのときに何か勘違いをしたのでしょうか。

【水源師】

ここでしょ、ここ全部でしょ、それで絞るでしょ、ここでしょ、それで頭に入れてずっと下げてるでしょ、で…

【参加者】

そのしている途中で、ガガガガガッと動き出した。

【水源師】

何回しました？ そのゴエンカさんの。

【参加者】

それは10日間のを2回。1年後にもう1回行って。

【水源師】

1年後はどうでした？

【参加者】

1回目は起こらなかったのです。二回目の後、家でしているときに・・・

【水源師】

一人で？

【参加者】

はい。

【水源師】

ああ、ああ。

【参加者】

はい。(家でしているとき)に、3カ月ぐらいずっと続いたのです。

【水源師】

それはね、やっぱり丹田の力がなかったかもわからない。基本の丹田の、第二チャクラの力も必要です。ここが「エネルギー (energy)」(精進)なのです、「七覚支」。だからその。

【参加者】

ああ、そうか、うんうん。

【水源師】

そうです。だからそれでは瞑想できない。だから、これを強くして乗り越えるためには、「精進」という「エネルギー」「元気」、これを持たないといけないわけです。このバランスが崩れているのです。

【参加者】

ああ。その3カ月ぐらいしてからは、出なくなっただけですけども。

【水源師】

それで、その後はずっと大丈夫ですか。

【参加者】

はい。

【水源師】

では、まあ、その間はしなかったでしょ、3カ月、しました？ ずっと続けていました？

【参加者】

続けていました。

【水源師】

ああ、そう。では、それでいいです。そのままやってください。そのうちやっていったら、身体が光り始めましたか。

【参加者】

全身というわけではないですけども。

【水源師】

そのうち全身が光ります。それでそれをずっと続けてください。そうしたらサンカーラ・ウペッカー（行捨智）まで行くのですけれども、そこは誰も今のゴエンカさんでは指導する人がいません。

【参加者】

なんか、煙みたいな感じのが・・・

【水源師】

それはニミッタ（丹光、禪相）です。それは他の方法に入っていきます。ただ、ゴエンカさんの場合はそれを禁止されているので、「全部、やめなさい」と。ヴェーダナ（受）で行くでしょ。だから、身体が光る方向に集中してください。そうしたら全身が光り始めますから。それで、そこをずっと続けていったら、どんどん上がっていきます。

この手法は誰もいないのです、私がそこに到達したときに「もうあなたに私は教えることはできないから、ゴエンカさんと直接、話してください」と。だから、そのニッバーナ（涅槃）に行く中間も、どうしていくかは誰も教えてくれないはず。

【参加者】

ではもう、全身光りという、その方向でいたらいいわけですね。

【水源師】

そうです、そこまでそれでやってください。煙の方は、今度はダンマヌパサナー（法随観、パオ系）の方に入っていくから。それもいいことなのですよ。だから、心がどちらに行くか迷っているわけ。

【参加者】

煙の方はでも2回ぐらいだけなのですけど。

【水源師】

それがニミッタの前兆なのです。というふうにな、やっぱり事細かに指導する必要があるわけなのです。それでニミッタをやれば、さっき言ったようにね、四梵天住（ブラフマ・ビハーラ (brahmavihāra)）という全世界を觀たりとか、いろいろなことができるわけなのです。過去生・未来生を觀ていくわけなのです。ゴエンカさんの場合は直接それですうっと上がっていくと。まあ、それはそれでいいわけなのです。

【参加者】

では今その方向で。

【水源師】

その方向で、ずっとやってください。ただしあまりね、油物はダメとか、そういうことはあまり気にしないで。それが逆に障害になります。身体に一番いいものを食べてください。お釈迦様は一言も「これ」って言っていません。ただしゴエンカさんはインド系だからね、インドでは肉を食べないから。その習慣で、またそれがピッタリ（インドの）気候では。

ところが、イヌイトとか北方インディアンはね、肉ばかり食べているからね、麦とか米を食べられないのです。では、そこでどうして修行しますか。

だから、お釈迦様は「これ食べろ、あれ食べてはダメ」とは、一言も言っていない。環境によって変わりますから。だから、そこであんまりカチンコチンになって「あれだ、これだ」と言ったときに障害が起こります。修行がうまくいかないよ。

【参加者】

分かりました。

【水源師】

本当にいいですか。いくら質問してもいいのですよ。

【参加者】

はい、あの。

【水源師】

そのゴエンカさんの合宿のときはダメですよ（食べ物に関して）、皆やっているから。ただ個人ときは、私はスリランカで頂くものなんでも頂いていたから。全く関係なく行ってしまう。

【参加者】

はい。今日はこれでもう十分です。ありがとうございました。

間違った瞑想方法について

【水源師】

次、誰かありますか。

【参加者】

瞑想について質問なのですけれど。僕は、全く瞑想はできなくて。去年の夏ぐらいから、坐禅を始めたのですけれど、その始めたときの坐禅の理解がまずくて、強制的に集中するようなことをやってしまったのですね。それで、頭の方が痛くなってきて、息とかお腹を集中して観ると、目の前が締めつけられるような痛みが出て。一番最初の頃は、それでも痛みが出なくていけていたのですけれど、今年の1月ぐらいから、それが出て、今まで9カ月ぐらいずっと痛みがあるのですけど。

【水源師】

どの手法で瞑想したんですか。

【参加者】

えっと、アナパナ（入出息念）で。

【水源師】

アナパナには四種類あります。どういうふうな教え方されました？

【参加者】

自分でいろいろ調べちゃって、勝手にやっちゃったのです。それで息を観るのだと思って息を観たり、お腹の膨らみ縮みを見たりとかして、自分で本を読んだりとか、自分でやってしまったので。今は、それは間違っていると分かっているのですけれど、痛みだけが止まらなくて。

【水源師】

では、今日、法話会と個人質問の後、ちょっと瞑想会しますので。そのときに指導します、

どうしたらいいか。これは好きな人だけ残って坐禅してもらうときに、もう 1 回、やり方を指導いたします。分かりました。気楽に座ってください。

【水源師】

次、誰かいますか。遠慮しなくてどうぞ。

【参加者】

今の方と同じようなのですけれど、世の中にある坐禅とか瞑想とかの本は、大体は間違っているということになっているのですか。

【水源師】

いや、しっかりとした指導者から受けてもらえばいいけれども。現在、私が調べた文献では、日本で言っていることを正す人が誰もいないと。こういう東京大学の A 学者でも瞑想者でも「だと言わない」と。それが「遠慮して言わない」ということなのか、それは人のために善くありません。正しいことをちゃんと言って「こうです」ということを言わないといけません。だから結局、本を読んでやった場合には、こういう結果になって。恐ろしいときには禅病という。これに入ったら一番、恐ろしい病気なのです。これに白隠禅師が入ってしまったと。

だから結局、文献仏教で実践仏教ではないから、こういう現象が起こって、9 カ月経っても痛みが取れないと。結局、心と身体が一体して、ナーマ・ルーパ（名色）だからね。間違っているから心が、心の方で受けたインフォメーション（情報）が完全なものではないから、これ不善心といいます。善心であれば三十四善心¹でこれが起こらない。だから、どこかが間違っているわけ。だから身体が反応して痛みが取れないと。下手したら「一生、取れない」ということにもなってしまう。恐ろしいことになっていくからね。だから、そこで「本当のことを教えてもらう」ということが、至難の業です。

チベットで最高の瞑想者は 96 歳でネパールにいますけど、自分の第一弟子しか会わない。一切遮断して洞窟の中。そうめったに会えるものではないのです。

だから、そのときに「自分は何を望んでどうしたいか」と、今回したい場合は聞いてください。説明して、こっちの方に行ってくださいと。あとはずうっと登っていくと。そのあとで、何か問題が出たら、また聞くと。そういう方法です。

その間に素晴らしい先生に出会ったら、その方向で行くと。そのようによいものはよいと。どんどんよいところを吸収してください。

【参加者】

ということはやはり、そういうのに進むことができる人というのは、本当に少ないというか・・・

¹ 善心の 34 種の要素。意識 1 種、共浄心所 19 種、共一切心心所 7 種、雑心所 6 種、慧根 1 種で 34 種になる。

【水源師】

そこが大問題です、現代。結局ね、本で読んで解説するでしょ、アビダンマとか。実際この人が体験なく、ほとんど言っているものであるし、パオの方でも、全教科のほうは12段階あるのだけれども、それで全教科を知っているということになったり、まあ大変な状態です。

夢を使う手法—無意識と意識の間—

【参加者】

合宿のときの話の続きにみたいになってしまうのですが、「夢を日記に付けてください」みたいなことをおっしゃっていただいて、ちょっとやっているのですが。

夢に入る、覚めた状態から入っていくときの状態みたいなことと、坐禅をやっているときに思考がある程度、落ち着いてくると、スカーッとこうクリアになって、という状態との関係というか。

【水源師】

あの、雑念が消えていくから、スカーッととなります

【参加者】

スカーッととなりますよね。でも、そのなんか「夢と覚めている状態の中間の状態」って、そのスカーッとという状態とは、ちょっと違うような。

【水源師】

違う。それはスカーッととした状態で坐れば最高。

【参加者】

ああ、そういうことなのですね。

【水源師】

そうです。そこが本道です。なかなかそこに行けないです。

【参加者】

行けないですね。

【水源師】

そこに行けば楽しい。いくらでも坐れる。だから、そこをつかんだだけで、そのポイントは今、分かったから、もし坐ってもね、そこの方に心を持っていけば、そういうふう楽しい心に近づいていくか。それを続けていてスカーッとするところを、どんどん長く保って

いけばよいです。

【参加者】

長く保てないです。

【水源師】

いや、もちろん。でも、その体験をできないのがほとんど。「体験できた」ということは相当進化していますから。だから、これは本当のヴィパッサナー（観禅）なのです、実は。実に簡単で。だから、これはもう少し続けてください、3年は。そうしたら相当進化します。

（参加者の皆さんに向けて）今、言っているのはね、「無意識と意識の中間」のところで。現代の医学では分からない領域なのです。この無意識のときは心電図に現れるわけなのです、注射を打ったりとか。意識の場合は回答できるのだけれども、「この中間」は分からない。

ところが、瞑想は「この中間」で進化していくわけなのです。それで今、合宿で「夢を使う手法」で、ここをどんどん進化させているときの今の話です。

【参加者】

ありがとうございました。

坐禅・瞑想に適した時間帯

【水源師】

それでよろしいですか。では、次、遠慮なしにどうぞ。

【参加者】

仕事でここ一年ほど生活の環境がガラッと変わって、これからもどんどん変わっていくと思うのですが、坐禅瞑想をするのに向いている時間帯というのは？

【水源師】

はい、朝3時から6時の間。夕方は6時から9時の間が一番、気がよいです。ただ、これは山の中での話で、街の中は電磁波が非常に強烈だから、うまくいかないときもあると思いますけど。できるだけ電磁波は避けた方がいいと思います。ここが現代の最大の問題で。

私は携帯電話が大嫌いでね、絶対に持たない。私の知っている方が頭を手術したのですよ、携帯電話を持っていないのです、足が震えて。それだけ強烈なものなのです。それでなくても、空中にいっぱい電磁波が飛んでるからね。その中で現代はますます（瞑想）しにくいけれども、なんとか頑張って、そのうち合宿でも来てもらったら、コツがつかめると思います。

そのほかに何か？

それで、今日は手ほどきしますから、一番大切なところ。そこから応用がどんどんききますから。

阿弥陀仏の浄土

【参加者】

阿弥陀さんの浄土の世界の話を教えていただきたいのですが。浄土の世界に往（い）くということは、もうそれ以上、下がることはないのでしょうか。寿命とかはあるのでしょうか。

【水源師】

「無量寿光」で、その中でね、修行していけば、次は涅槃に入ると。大変よいところ。

【参加者】

それはもう確実に・・・

【水源師】

もちろん。本物です。ただし浄土はね、四方向にあるわけ。阿弥陀の方は、阿弥陀の極楽浄土。阿閼の方には東にもそういう浄土（妙喜世界）があります。南の宝生仏のところにもまた浄土があります。北の不空成就如来のところにも。四方向に浄土があります。ただ私たちはこの阿弥陀という、ナーガールジュナ¹（龍樹菩薩）様（150 頃-750 頃）が発見して連れていってくれると。非常に素晴らしいところです。あります。

だから今、言ったように一生懸命、念じて。虫でも往けるのだから²。人間が往けないわけがない。「悪しきことを避け、善きことをし、愛の中で生きて、阿弥陀と念じていけば、必ずや往けます」。ただ「酒を飲んで暴れて、人を殺して盗みをして、これでは往けません」。まあいつまでもいつまでもいたいところです、その中で。また天界とは違いますよ。

だから、昔の方がこう言ったことはね、現代では半信半疑だけれども。なぜかといったら、体験して伝えてくれる上人がいないから、こうなっているけれども。たまたま私は体験して「存在します」と。また、そういうふう的一生懸命、信心して心を磨いていけば、あっちで知っているから、本当に往けます。そういうことも法も持たずに生きた場合は、大変なことになると思います。どんなにお金があっても、どんなに地位があっても、全くの無駄。「阿弥陀様の手が届かないから」ということらしい。だから「手の届く中へ入れば大丈夫」ということです。

¹ Nāgārjuna : 龍勝、龍猛とも訳される。南インドのバラモン出身の僧。大乘仏教の大成者で中観学派の祖。「八宗（すべての大乘仏教の宗派）の祖師」「百本論師」などとも称される。

² 阿弥陀仏の第四願に「諸天・人民、蜻蛉蠕動の類、わが名字を聞いて慈心せざるはなけん。歡喜踊躍せんもの、みなわが国に來生せしめ、この願を得ていまし作仏せん。この願を得ずは、つひに作仏せじ」（『大阿弥陀經』卷上）と、蜻蛉蠕動（飛びまわる小虫、うごめくうじ虫）の類の浄土往生も明確に誓われている。

実践仏教と学問仏教

【参加者】

感想になるのですけれども。今、龍谷大学で真宗学を勉強させてもらっているのですけれども、今日のお話を聞いて、やはり真宗学、まあ学問というやつなのですから、経典に書いてある文献などを見て、その書いてあることで論理を組み立てて、そこにこう真実を導き出そうということを、学問としてはそうだと思うのです。でも、今回は、仏道というのは、やっぱりその体験、宗教的なその体験を伴っているからこそ、そこから真実が述べられているもので、だから、頭の中の理解で論理等を組み立てても、そこにはやっぱり真実というのではないのだから。

【水源師】

ないどころか、心がおかしくなりますよ。これケンブリッジ大学と、この羅列した文献(『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴーサへ』)を読んで、この東京大学で博士号を持ってA教授になっているけど、ひもといってみたら、おかしいことがいっぱいあるよ。実際とは違いますよ。(書籍を手にとって) どころかな。

四道において、苦諦の完全智、集諦の放棄、滅諦の作用、道諦の修習。何を意味しているか分かりますか？ 分かるわけない。これはね、ナーマ・ルーパ(名色)の発生と、それから空中にとどまって滅諦で消滅することの、これを観るということなのです。(瞑想で) 観なければ、これどうするのですかね。

まあ、これは学問で、その中のインド哲学ではよいでしょう、そういうふうに。でも全然、世間とは関係ないし、実際界とも関係ない、架空世界のことであってね。ただ、いろいろな文献を並べ立てても、実際のことには全く使えないではないですか。意味も分からないではないですか。だから、こういうことが起こります。(再び書籍を開いて) なんといったかな。

『解脱道論』と『清浄道論』では、四諦説を提示する箇所が異なっていることに注意しなければいけない。

と、ここはですね、同体になっているから。文献では異なるかも知れないけれども、どちらも一緒なのです。だから、頭の使い過ぎで、こういうことを言い始める。

そうしたら、あなたは今、学生で、完全に信じ込むでしょ？ これでもう誤解で終わり。これでインプットしたら、頭から抜けないわけです。大学でギュッとやられて、それはそれでいいですよ。ところが、次の人生どうしますか？ 人間界にも生まれることは難しい。これ、ちょっと読んでみる？

だから、こういうふうにね、体験だけで分かるのですよ、何を書いてあるか。例えばですね、どこだったかな、禅定かな。

四禅定から欲界、色界、無色界に入る。

と、それはね、「第四定禅を使わなければカシナ(十遍)の瞑想に入れない」ということなの。その手法は、ここに書いてある。そのたった2、3行が、修行としては一冊の本ぐらいになるわけです。お話にならないでしょ。それでパッとおしまいだから。それで「分かった」とな

る。これで人を導いたら大変なことになる。自分も分からないし、人も分からないで「分かった」ということになる。ということが「正常だ」となっている。

だから、何を書いても「そうだ、そうだ」と受け入れるような体制になってしまっている。というふうに、なんかこれはチベット文献で『解脱道論—頭陀品チベット校訂本文並びに訳註』（ウパティッサ述作・佐々木現順校註、法蔵館、1958）の中で書いているのですけれども、このチベット版と、こっちの『清浄道論』（佛陀瞿沙造・石黒彌致譯註、東洋文庫、1936）の南伝とはちょっと違いがあるけれども。この中で問題になるのは、簡単に言えば「頭陀の功德」といつてね、アラハト（阿羅漢）ね。「8カ月の間、屋根のない墓の間で坐る」とか。「雨期のときだけは、木の下で坐ってもよろしい」と。これやったらね「七覚支」の「精進」「エナジー」、すぐ消えてできない。という現実離れしていることを書いているわけ。

だから、お釈迦様がここに『サティパッターナ』で「七覚支」を、核心を書いている。これから外れているから。ということも誰も解説していない。ということは、体験なしに指導しているか。むやみやたらになっているか。その本の教えではね。

ただし、世の中には立派な先生がいて、いっぱい隠れてやっているかもわからないけどね。表面的には今、現状はこうですね。

【参加者】

はい。

日本のボロブドゥール

【参加者】

ボロブドゥールのようなものが、日本にもあるということですけど、他にもあるのでしょうか。

【水源師】

ここだけだと思う。日本だけだと思う。ボロブドゥールの構築は、弘法大師様が日本に帰ってきて、ナーガールジュナ¹（龍樹菩薩）様（150 頃-750 頃）が他界したときが 1200 年前。それで、ここの最も大切な場所に、なぜか弘法大師様が龍神様に連れられて、そこに行ったわけ。また、役行者も修行したと言われてます。その場所がゴールデンポイントになっているわけ。そのように構築したわけです。金剛界・胎蔵界と。それをボロブドゥールに行行って発見したのはね、赤不動、青不動の暗号によって。ちょうど『ダ・ヴィンチ・コード』みたいなものです。それもどちらも、ただ人が行っても動かさないわけ。第九禪定だけでしか動かない、どちらも。というふうに、そこそこがつながったわけ。

まあ、ちょっと意味が分からないでしょう。なぜかといったら、K さんは一緒に来たから。もう気絶するような状態なわけ、私が連れていったら。あまりにもすごい出来事だったから。

¹ Nāgārjuna : 龍勝、龍猛とも訳される。南インドのバラモン出身の僧。大乘仏教の大成者で中観学派の祖。「八宗（すべての大乘仏教の宗派）の祖師」「百本論師」などとも称される。

だから一般の世俗では分からないわけ、何が起きているか。その内容を話せば、まあ神世の時代から、天照大神から、コノハナノサクヤビメ（木花咲耶姫）が、なぜ富士山に出てきて皆さんと一緒に瞑想したようで、全部、解答が出てきたわけですね。

だから、人間界ではもうこの世俗界だけに頼っては、大変なことになると。その一番よい例が福島原発。「絶対大丈夫」がそうでしょ？ なぜなら（先ほどの書籍を示して）こうだもの。こういうことでやっているから。

だから、神秘体験なくして、宗教は非常に難しいでしょ。あの、狂信的になるし、正しい神秘体験でないと、またおかしいことになってしまう。無理矢理にダーッとやって「アー体験した」と、そうではないのです。静かに瞑想しながら行って体験できます、自分の力で。それが本物です。人から与えられるものではないのです。



日本のボロブドゥールからの景色

『金剛般若経』

【参加者】

『金剛経』（『金剛般若経』）って、ちょっと勉強しているのです。『ダイヤモンド・スッタ』って言うのですか。

【水源師】

ダイヤモンド、ああ、あれは素晴らしいお経で、このお経を達磨大師様が示しました。ここの中で一番大切なことは「この世には、あらゆる手法で涅槃に到達できる」と。その中で最も大切なことは「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是観」（一切の有為法は、夢・幻・泡・影の如く、露の如く、また、電の如し、応に是の如きの観を作すべし）と。ここが非常に大切なところで。これが何を意味するかと言えば、結局、光が稲妻がパッと光ったでしょ？これが3分（ぶん）の1秒。3分の1秒のそれを見てお釈迦様は、身体の名色のパルセーション（振動）が分かったわけ、ダダダダダと。それで、この実際の、私たちの実際の架空世界をちゃんと観えたわけ。ということが、そのこの詩の中に組み込まれているわけ。だから、非常にあれは大変なお経で、文学的に読んでも分からないですよ。

私は「これを全部、千回通して読めば、絶対に悟る」というので、ダーッと1、2時間ぐらいしか、寝ないでやったわけなのです。それで、七百六十何回かときにポーンと天からストップをかけられて「やめなさい」と、「いくら暗誦してもこれはダメ」ということで。でも、それをやった後、信じてやったことに対してのご褒美は来ましたが。

なぜかといったら「如露亦如電」、露がパッと出ると、光がパッと光ると。このことはこうなのです。結局それは「光る」、あれは0.32秒。そして光のスピードと空間をやればね、大体、マイナス12乗。ピコメートルという非常に短い空間で私たちは生きてい。ということ解説しているお経があるのですよ。『Law of Universe』という、スリランカの経典を見て、それを発見したわけ。それを「応作如是観」というわけ。

それで、私が一番、頼ったのはですね、やっぱり『般若心経』です。それだけダーッと唱えて行って、ダンマヌパサナー（法随観、パオ系）に出会って、ダンマヌパサナーは『般若心経』の題目を書き連ねていた、ということが分かったわけ。あとは体験しかないと。それで、『金剛般若経』の中の「目に見えるものでも、目に見えないものでも」と、「あの中の命は卵の中の命もある」と。それから「湿」、「こういう空中のモヤモヤの中の生命体もある」と書かれているでしょ、『金剛般若経』に。書かれているのですよ。ま、そういうふうに、ずっと生命体の不可思議さとか、いろいろなことを書いているけれども、相当長いこと、私、読んでないのだけれども、『金剛般若経』にも非常にお世話になりました。

これは達磨大師が6回、毒を飲んで毒殺されて、墓から出てインドに帰るとき、そのときに自分の草履一つを置いて、杖に自分のもう一つの草履をかけて、パミール高原を通過して、インドへ帰って往くときに、そのとき、武帝の宮殿の官吏がね、「あれ、大師様どこに行くんですか」と。「これからインドに帰る」と。そのことを宮廷に報告したら「いや、達磨大師は

死んで墓に埋めてある」と。掘り返してみたら、草履一つ。それを 250 年、少林寺に掲げているわけ。

達磨大師様が「その不可思議なことを読んでください」という非常に素晴らしい経典です。まあ、訳も分からなくても私、読んだけれども、なんかよい気持ちになりましたね。それで、その解答は最後のところ。「応作如是観」「如露亦如電」。それが深いナーマルーパ（名色）のことを示しているわけ。そこには『達摩多羅禅経』¹と、この作者はいろいろな学説がありますけれども²、韓国の曹溪宗、チベットではそのまま受け入れていると。他ではどうも違うのではないかと。達磨大師は 124 歳で中国に渡ったわけ。その般若多羅³が先生で、67 年間インドに残って、行く時間を待っていたわけ。

私も今回、前回、ミャンマーで、758 歳のウ・パンディタというお坊さんに会ってくるしね。その先生は 1046 歳。というふうに、私たちは 50 年、100 年とかなんかこうなっているけど、実態は分からないわけですよ、本当に。今でもネパールの山奥には 1000 年、2000 年の行者がいるかも知りませんよ。実際、私は 700 歳とか 500 歳とか会ってきて「あれは嘘だ」とか西部で言うけども、やっぱり違っていました。エネルギー体が全然違う。

だから、常識の中だけで生きてはね、次の世に行くときに、この常識が足かせになって、行きたいと思っても、行けないわけ。さっきのように、経典仏教で頭へパーッと詰めたらね、分からないものを詰めたら、コンピュータでも破裂するでしょう、いろいろなプログラムでね。正しいプログラムだったらよいけども。それが、実態のないプログラムだから、コンピュータ壊れますよ、人間も一緒です。

それで、分かりました？『金剛般若経』、どこか分からなかったら、分からないところを言ってくれたら、ちゃんと解説します。

【参加者】

勉強します。ありがとうございました。

【水源師】

はい、はい。がんばってください。でも、『金剛般若経』は非常に重い経典だから、体験を積みながら読んでくださいね。そうでなければ、本に負けてしまいます。頭でやらずに、一回一回その字を読むたびに、ずうっと瞑想して、頭ではなく心でダーッと字を持ちながら行くと。そういう手法があります。

¹ 東晋の仏陀跋陀羅（359-429）の訳。達摩多羅と仏大先が著したもので、禅定三昧に入る方法としての「数息観」「不浄観」「十二因縁観」などの観法を説く経典といわれる。

² 達摩多羅について、『曹溪大師伝』（781 年以降？）では西天二十八祖・東土初祖の菩提達摩を達摩多羅大師としており、これは『歴代法宝記』（8 世紀末）が用いた『達摩多羅禅経』に基づくといえる。『法宝記』では菩提達摩多羅となっており、チベットではすべてそれを受けている。『伝法正宗記』（1061）には「初名菩提多羅、亦達摩多羅と号す」とある。

³ 達磨大師の師で、西天二十八祖の第二十七祖。西天二十八祖とは、インドにおける二十八人の伝灯の祖師のことで、第一祖は釈尊から法を受け継いだ摩訶迦葉尊者、最後の第二十八祖が達磨大師。

愛と無我

【参加者】

私は10年前に卵巣がんをして、3年前に乳がんをしたのですけれども、心の持ちようが悪かったのかどうか分からないのですけれども、「心の浄化」というのを目指しているのですけれども。今、いろいろお話しただいて「〈人のために生きる、それから愛の中で生きる、真理のなかで生きる〉ことが大事や」みたいなお話をお聞きしたのですけれども。それをもう少しかみ砕いて、具体的に。

【水源師】

はい。具体的に言えばですね。例えば私にワンちゃんがあります。それで一緒に遊ぶと。楽しく、意地悪も何もしているけれども、「お互いの信頼するところ」ということですね、「人を裏切らない」「欺かない」と。そういう、人間ではそうなります。植物では「水をかけ、花が大きくなって、一体化していく」中に愛が芽生えていきます。これはすべての命の源です。宇宙的なものです。ところが、今はあまりにも隔離されてしまっているから、「愛自体が何であるか」ということが、一生懸けても分からないようになっている。

実に簡単。結局、人と人と接したときに、そこに嘘・偽りがなかったら、すぐ愛が芽生えます、喜びだけで。「いかにしてお互いに善いことをし合おう」と。「助け合おう」と。喜びだけです。ところが、そこから「私、あなた」と分かれたときにアッタ(我)、アッタが走る。私、あなた。それが一体化になったときには「にんべん」に二つ、「仁」、仁義の「仁」、これが本当の愛なのです。二つが一つになる。それが「無我」。というふうになかなかない。

それで、まず今の世にはね、水道にはたくさんのケミカルが入っています。それを消すにはね、私が2年前にシュンガイトという鉱物を持ってきました。それはそういう毒を全部、消してしまいます。今、手元にないのだけれども、それがあればよろしい。それで、ほとんど身体の毒を取ってしまうから、放射能も全て。それがいない場合は、できるだけきれいな水を飲んで。私はどうも水道の中に、たくさんのケミカルが入っているような気がします。だから、シュンガイトで通過した水は全然味が違うし、身体が軽くなるのです。だから、いつも私はシュンガイトの水を飲んでいるのだけれども。

だから「自分が悪いのか」とか、そうではなく。因縁というのは18の物質の因縁と6の心の因縁で組み合わさって因縁。もっと詳しく言えば、28の物質の因縁と81の因縁がかみ合わさって、109が絡まり合っていていくのが因縁だから。そう簡単に「因縁、因縁」とは言い切れない。そういうことは「地球の因縁」「国の因縁」「大地の因縁」、「人間だけの因縁」ではないのです。そこを皆、外している。

だから、まずはあまりそういう「私が悪いのか」ということは、すべて捨てて、一早く身体に「エナジー」を取り戻すと。それにはどうすればよいかと。多分ヴェーダナヌパサナー(受随観、ゴエンカ系)、ゴエンカ氏から始めるのが一番よいかもしれない、最初は。それで、

これは非常に有効でね、本当に浄化します、私が見た限り。時間がない場合は来年、合宿しますので、そのときにでも来てもらってもよいし。というのは「たった2日間やって1年間でもう病気が全部消えている」と、20数年、病に悩んだ人が。それぐらい、すごいものです。まあ、そういう例証もあります。

それから現在はね、あなたの患部あるでしょ、そこをいたわってあげてください。優しいエネルギーを送ってください。乳がんとか、その手術したところ。それで身体全体に、その優しい、小さいとき、お母さんに抱かれたでしょ、おっぱい飲んだことを覚えていますか？その「愛・慈悲の心」、我が子。そのバイブレーションで全身を上から下、下から上、ずうっと。特に患部をずうっと当ててみてください。相当、変わると思います。もし分からなかったらKさんに連絡してもらったら、また解答します、どういう状態か。赤子のように抱かれた、そこが愛です。だから、父と母の間に眠る赤子のような大平安の、それを示すのが愛といます。

758歳のウ・パンディタ比丘

【参加者】

先ほどお話しされていた、700歳の行者さんは、普通に生活とかできるような状態でおられるのでしょうか。

【水源師】

もちろん。

【参加者】

お話とかも。

【水源師】

そうです。ただし、この人は空中から現れて空中に消えていくから。もう身体が違うから、カシナ（十遍）の行法を使うんだと思う。だから、ますますマジックがかってね、信用できない人も嘘ではないか（苦笑）、というふうに思う人がいるのだけれども。

そこに行くには相当に難しいですよ。私がタクシー使ってマンダレー駅からずうっと1日かけて、その村に行って、そして私が行ったら、普通はめったに出でこないのに、私が着いたら「お待ちしていました」と、4人の行者がいつべんに出てくる、ということは（それまで）なかったわけ。

というのは、私がおのときバガンでね、護摩焚きやったわけ。そのときに「三十七仏の行をやれば、弥勒菩薩を待たなくてもいい」と。この方々は弥勒菩薩に遇いたいがために、ずっと長生きしていたわけ。それで「私がたまたまその行法を、三十七仏という護摩焚きの行法をインドネシアでやる」ということをもう分かっているわけ。それで「お待ちしていました」と。それで、そのゴールデンポイントで、第九禪定を使ってやることも分かっているの

でしょうね。そのときに天界と地界がつながるといことも分かっている。

だから、ボロボドゥールの一つだけ首を出した仏像があります。護摩焚きをやったのは、あとで気が付いたのは、その仏像がじっと私たちを見ていたということ。というふうに、想像を絶するわけなのです、構築から、やる場所から。西の方の阿弥陀の結界を組んだ方向でやっているわけです。それで、私が三十七仏を唱えているわけです。だから、この行者様たちが「お待ちしていました」と。だから、想像を絶する大ロマンの世界ですよ、仏界は。

【参加者】

全く夢のような。

【水源師】

それが現実に、日本ではもっとすごいことが起こっている。それが続いている。

(Kさんに) ねえ、ぶっ倒される、という現実を見て、だから仏教というのは、本当の宇宙の大ロマンなのですよ。

それで、キリスト教の場合は前世がなくて突然、神につくられたと。来世は天国か地獄と。ということ「第1ニカイア公会議」¹という会議で決めたわけ。その前は「前世もある」ということだったわけ。というふうにつくり替えているわけ。ユダヤ教でも、一神教というけど、ずうっと前は、男神、女神があったわけです。アダム、イブ。それが神一つだけにした。アダムは神であるわけ。神は最後に残した言葉、アダムだけに残しているからです。それで、最後の言葉²は「諸悪莫作 衆善奉行」³ (しょあくまくさ しゅぜんぶぎょう)、一緒のことなのです。全ての仏は、この言葉を言ってるだけ。

ただ私の生徒がね、「今、私たちのユダヤ教でも、誰一人として瞑想する人もいない」と。「いっぱいシナゴグという教会もあるけれど、ただ空の家だ」と。それで、「私が先生（水源禅師）から教えてもらって、本当に感謝している」と、瞑想の方。つまり、アブラハムも瞑想、モーセも瞑想、すべて瞑想、それしかないわけなのです。その瞑想した場所が、今のエルサレムとかね、そういう聖地になるわけ。聖地があったわけではなく、人間が（そこで瞑想を）したから聖地になるわけ。お釈迦様が菩提樹の下で坐ったから、聖地になるわけ、瞑想したから。

だから「いかに瞑想がすごいか」ということは、瞑想することによって、行が増えれば、目に見えないたくさん幽霊（餓鬼）を食べさせているのですよ、実は。だから、その恩恵ですごい功德をもらうわけ。幽霊は食べられないのですよ。食べる物は香とかね、口が非常に小さくて入っていかないわけ。そういう餓鬼界もちゃんとあるのです、だから、餓鬼って

¹ 325年5月20日から小アジアのニコメディア南部の町ニカイア（現トルコ共和国ブルサ県イズニク）で開かれたキリスト教の歴史で最初の全教会規模の会議（公会議）。アタナシウス派とアリウス派のどちらを正当とするかの論争でアリウス派を異端と決定し、皇帝がキリスト教の教義決定に介入する嚆矢となった。

² 『水源禅師法話集』第23巻「善と悪」（4頁）参照。

³ 諸々（もろもろ）の悪を作（な）すこと莫（なか）れ、衆（もろもろ）の善を奉行し。

腹が減って苦しいそうです。だからウヨウヨしていますよ、この辺も。この前、東京のどこかの街で、いつも男の人が路上に立っているわけ、カメラに写っていると。女の人が携帯を持って歩いて、通過しているわけなのです。「あ、幽霊だ」と、初めて分かる。

カメラというのはすごいもので。人間には見えないけれど、カメラはちゃんと見る、現代は。ちょっと前は「嘘でしょ」とバカにされたけど、もうできない状態になっています。だから、そういう人も苦しいのです、それも生き物なんです。だから全てのものに愛を捧げなければ。

【参加者】

もう一つよろしいですか。お釈迦様が説法なされて話されていたときに、昔、在家の方でも説法を聞いただけで預流果になりましたとかいうものを読んだことがあるのですけれども。

【水源師】

預流果どころか阿羅漢になったり。

【参加者】

あの、説法を聞いただけで？

【水源師】

聞いただけで。それだけ力あるわけ。だから本物の仏に出遇ったら、もうしめたもの。遇うだけでも大変。だから、皆、お釈迦様の説法を聞いているときに「ああ、気持ちがいい」って杖をついたら、カエルだったわけですよ。そうしたら、死んだカエルも気持ちよく聞いていたわけ。そして、天界に上がっていったわけ。生まれ変わるわけ。人間だけが天国ではないのですよ。虫でも人間に生まれるし、人間もまた虫になるし、虫でも天国に行っちゃうわけ。だから「あらゆる生き物を大切にしてください」というわけ。

しかし、私たちはこうして食っているから、まあ、拝んでね、ありがとうございますと。こういう生き物たちが全身供養しているから、無駄に投げるものは一つもないように。その「愛で身を捧げてくれている」と。こういう生き物はすぐ転生して善い処に行くわけですよ。そうでなければ、この世の中が動かないから。北極の方では、どうしても獲物を殺して食べないといけないから。それで神に祈るわけですよ。そうしたらスーッとトナカイがやってきて食べられるわけ。だから、信仰と生活が一体化しています。特にシベリアのシャーマンはね、マイナス 50 度という強烈な寒さが来たらすぐ分かるから、自分の身体を石にして中に入っていくと。信じられないことを言っていますよ。

まあ、聞けば聞くほど（笑）、まあそういう報告を受けています。特に有名なアメリカの、カルロス・カスタネダという UCLA の人類学者が、メキシコのナーガ族に行って「この飲み物を飲めば、身体が変身してオオカミになる」と。実際やったら、なったわけ。

というふうな、カリフォルニア大学の学者が書いたものだから、世界的に有名になった本があります。だから、そういうふうに、私たちの常識で外れ、この狭い人口インフォメーシ

ョン（情報）の中では、ほとんどシャットアウトするから。だから、その中で、ただ正しいのは結局「愛の中で人のために生きていく」と、これは本物。ほとんど間違いない。だから、そういうふうの世界を旅して探さなくてもね、ただそれだけで、こういう素晴らしい過去仏の法も今でも生きているし、お釈迦様も「人のために尽くしなさい」ということが、本懐にありますね。だから「諸悪莫作 衆善奉行」¹（しょあくまくさ しゅぜんぶぎょう）と、これしかない。いいですか。

【参加者】

ありがとうございました。

【司会者】

その 758 歳の方も、ホームページ（『エカヤーナ ビハーラ | 水源禪師』「写真」ミャンマー2013）に写真が出ていましたですね。

【水源師】

ああ、出てたかもわからない。私が直接、衣をお布施した。私のホームページにこれから全て「法話集」とか「写真集」が載りますので、そこから見てください。

【参加者】

はい、ありがとうございました。

¹ 諸々（もろもろ）の悪を作（な）すこと莫（なか）れ、衆（もろもろ）の善を奉行し。



左からウ・コビタ比丘 (1046 歳)、ウ・パンディタ比丘 (758 歳)
 シン・オッタマヨ沙弥 (561 歳)、バドゥー・タン・アン優婆塞 (204 歳)



水源禅師と鼻を隠されているウ・パンディタ比丘 (758 歳)

水源禪師法話集 29

(2013年10月26日 京都法話会)

2014年11月28日 発行

編集兼発行 一乗会